世の光であるイエス

ヨハネ福音書8:12-20
【新改訳2017】

8:12 イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」
8:13 すると、パリサイ人はイエスに言った。「あなたは自分で自分のことを証ししています。だから、あなたの証しは真実ではありません。」
8:14 イエスは彼らに答えられた。「たとえ、わたしが自分自身について証しをしても、わたしの証しは真実です。わたしは自分がどこから来たのか、また、どこへ行くのかを知っているのですから。しかしあなたがたは、わたしがどこから来て、どこへ行くのかを知りません。
8:15 あなたがたは肉によってさばきますが、わたしはだれもさばきません。
8:16 たとえ、わたしがさばくとしても、わたしのさばきは真実です。わたしは一人ではなく、わたしとわたしを遣わした父がさばくからです。
8:17 あなたがたの律法にも、二人の人による証しは真実であると書かれています。
8:18 わたしは自分について証しする者です。またわたしを遣わした父が、わたしについて証ししておられます。」
8:19 すると、彼らはイエスに言った。「あなたの父はどこにいるのですか。」イエスは答えられた。「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、わたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう。」
8:20 イエスは、宮で教えていたとき、献金箱の近くでこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。

【祈りながら考えよう】

（１）主に従う者にはどのような約束がありますか。二つ挙げて下さい。

（２）14節の「イエスの自己証言」はどうして真実だと言えるのですか。

（３）「父なる神」を知る方法は何ですか。

【解　説】

（１）世の光であるイエス

イエスは再び人々に語られた。「わたしは世の光です。」（12節a）

「再び……語られた」という表現は、私たちを8章２節へと連れ戻す。２節で私たちが読むのは、主は宮で座(すわ)って民衆を教えておられ、その時、姦淫の現場で捕らえられた女が主の前に連れて来られた、ということである。一時的に主の教えをさえぎり中断させた。しかし、事件の決着がつき、告訴人も告訴された者も立ち去った時、主は教えを再開なさったのである。だから、「イエスは再び…語られた」という表現が最も自然に出て来るのである。

「わたしは、世の光です」と主は言われた。このことばは、この世が闇の世であることを示唆している。この闇というのは、神についての無知の闇のことで、主はその暗闇の世に、光をもたらすお方である。その光は、「いのちの光」である。「いのちの光」とは、私たち人間が人間として生きていく上に必要な光であり、心の霊的光のことであり、いのちを与える光である。

人は、イエス・キリストのみもとに来るまでは、霊的に死んでいる。主イエスのみもとに来て、主を信じる時、いのちが与えられる。こうして、神が私たちに用意していてくださる本当の人生を歩むことができる。

（２）主に従う者への約束

わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持ちます。」（12節b）

①「わたしに従う者」とは

主を信じ、主に従う者にはすばらしい約束が与えられている。主に従うとは、ただ一人の導き手・救い主として、主に自分を全面的に余すところなくゆだねることである。

イスラエルの民が荒野の旅の間中、雲と火の柱に従い、その動く時に動き、そのとどまる時にはとどまり、疑問を投げかけることもなく、信仰によって進んだように、人はキリストに対してそのように振る舞わなければならない。「子羊が行く所、どこにでもついて行く」（黙14:4）べきなのである。

②「闇の中を歩むことがなく」

キリストに従う者は「闇の中を歩むことがな」い。それは、世の光であるキリストを心の中に迎えているからである。時には道なき所を行くように思われることがあっても、光であられるキリストを心に迎えている者には、道をはっきり知ることができ、迷うことがない。天の御国への道を見分け、自分がどこに進んでいるかを知っている。

③「いのちの光を持ちます」

主に従う者は「いのちの光を持つ」。御言葉と聖霊によって、光が自分の上に照らされているのを心に感じる。主に従う者にキリストが与える光は、衰えることがない。その霊的光は、病や死に揺るがされず、永遠に燃え続けて消えることがない。人生という旅の間中、彼を導く光が彼の周りを照らし続け、その行いと生き方と会話とによって、光を反映させる。

（３）自分で自分を証ししている

パリサイ人は、今度は律法の観点からイエスに戦いを挑んだ。

「あなたは自分で自分のことを証しをしています。だから、あなたの証しは真実ではありません」と言った。確かに、聖書には、「自分の口でではなく、ほかの者にあなたをほめさせよ。自分の唇でではなく、よその人によって」（箴言27:2）と教えられている。本人の自己宣伝は当てにならないというわけである。

（４）どこから来て、どこへ行くかを知っておられる方

主の答えは、私たちが普通考えることのできない驚くべきものであった。

「たとえ、わたしが自分自身について証しをしても、わたしの証しは真実です。わたしは自分がどこから来たのか、また、どこへ行くのかを知っているのですから。しかしあなたがたは、わたしがどこから来て、どこへ行くのかを知りません。」（14節）

この「どこから来て、どこへ行く」ということは、その人の本質を意味する言葉である。だから、主イエスは、ここで、「わたしは自分がどういう者かよく知っている。わたしは神から来たのだということを知っている。しかし、あなたがたはわたしの正体をつかむことができない」と言っておられる。

ここで、主イエスはご自分のことを、実にはっきりと超自然的な神であると主張しておられる。

（５）父がわたしについて証ししている

「あなたがたは肉によってさばきますが、わたしはだれもさばきません。たとえ、わたしがさばくとしても、わたしのさばきは真実です。わたしは一人ではなく、わたしとわたしを遣わした父がさばくからです。あなたがたの律法にも、二人の人による証しは真実であると書かれています。わたしは自分について証しする者です。またわたしを遣わした父が、わたしについて証ししておられます。」（15-18節）

主がここで言われたことは、パリサイ人たちは、人を「肉によってさばく」ということである。「肉によってさばく」とは、上っ面で判断するという意味と、生まれながらの人間の邪悪な思いと偏見によって判断するという意味がある。

また、主はご自分には使命というものがあることを言明しておられる。どういう使命かというと、父なる神から遣わされて世の人々を光として照らし、彼らを救うという使命である。

ここでは、「わたしを遣わした父」という言い方で語っておられる。主イエスには、主イエスをお遣わしになった父なる神が天におられ、主イエスは天から遣わされて来た方なのである。だから、その主イエスをこの世に遣わされた父なる神が、主イエスのことを証ししておられるというのである。

もちろん、主イエスの場合、父なる神が証ししておられるが、主イエスご自身の証しも有効なのである。だから、「わたしが自分の証人であり、また、わたしを遣わした父が、わたしについて証しされます」と言っておられる。

どうして、人間の場合だと自分の証言はあやしいのに、イエス・キリストの場合は十分であると言えるのか。それは、主イエスが神であられるからである。

人間は、その人と働きとは別々であるから、その人の働きがその人を証明することになるが、イエス・キリストはご自身が光そのものであるから、光り輝くという働きが、光そのものと切り離すことのできないお方である。だから、自己証言だけで十分なのである。

（６）父なる神を知る方法

パリサイ人たちは、主イエスにこう言った。「あなたの父はどこにいるのですか」

主イエスは、最後に次のように答えられた。

「あなたがたは、わたしも、わたしの父も知りません。もし、あなたがたがわたしを知っていたら、わたしの父をも知っていたでしょう」

ここで主が語っておられることは非常に重要なことである。主が言明しておられる通り、イエス・キリストを通してでなければ本当の神を知ることはできない。神はイエス・キリストによってご自分を啓示して下さったのだから、イエス・キリストを通さずに神を知ることはできない。